



「思想化」して生きる 青年は「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

著者	深谷 美枝
雑誌名	明治学院大学キリスト教研究所紀要 = The bulletin of Institute For Christian studies Meiji Gakuin University
巻	53
ページ	243-265
発行年	2021-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10723/00004108

「思想化」して生きる

—青年は「知的障害者」として生きることを何故選んだのか—

深谷美枝

1. はじめに—中村君との出会い—

筆者が中村隆君（仮名）と出会ったのは懇意にしている知的障害者のグループホーム施設長 A さんから「自分の福祉施設や機関での経験を是非語りたいという当事者がいる」という連絡を受けたのがキッカケであった。それが中村君であり、彼は自分の物語を語ることによって意味を再構築する「ナラティブアプローチ」的支援⁽¹⁾を受けている最中であり、同グループホームでの各種実習や教育機関での授業で進んで体験を語っていた。

ただちに現場に赴き、信頼関係を構築しながら五回に渡り十数時間の面談を重ねることになった。中村君は19歳、「軽度知的障害」とされている青年⁽²⁾である。しかし、彼は言葉遣いも丁寧に語彙や表現力に優れ、趣味や興味関心も広く、社会的なスキルも高い。コミュニケーション面でも発達障害の傾向も感じられない。

一体何故、そんな彼が社会的に「知的障害者」として生きているのか。それが初対面から筆者の大きな問いとなった。⁽³⁾

2. 「語り」の分析から見えてきたこと

これまでの「語り」から見えてきたその答えをこれまでの筆者の三本の論文⁽⁴⁾からまとめてみることにする。それは本人の物語と支援者側のストーリーの落差として要約されるだろう。先行して彼の略歴を再掲する。⁽⁵⁾

両親からの虐待により三歳で児童養護施設「ひかり学園（仮名）」に入所、16歳まで同園で育った。中学までは普通学級で過ごし、高校の時自らの意志で特別支援学校高等部に進学する。16歳の時「ひかり学園」から逃亡し、児童相談所に保護され、施設側の再三の説得にも応じることなく、一時保護所で一年間生活した。17歳から里親加藤さん（仮名）の家庭で一年間生活する。18歳で特別支援学校卒業と同時に里親加藤さんの勤務する現在のグループホームでの生活を始める。学校からの紹介で大手の外食産業チェーン「うめや」（仮名）の特例子会社で働き始めるも、パワハラから一年で適応障害の診断を受け退社、生活保護を受給開始する。現在就職を含めて進路を模索中。傍ら子ども食堂でボランティアをしながらリハビリに努めている。

(1) 児童養護施設での経験

支援者側の「ドミナントなストーリー」⁽⁶⁾としては、おそらくは幼少時の被虐経験から情緒に障害を持つ青年がいて、ストレス耐性に乏しく日常的に爆発を繰り返すために支援困難であった。進路決定時に普通学校への進学という誘導にもかかわらず、自分勝手に特別支援学校への進学を決定し、障害者としてのコースを選択した、という物語になるだろう。

本人の「語り」によれば、利用者との厚い壁や上下関係というような

施設特有の組織構造の中、信頼関係がない職員から日常的に精神的・身体的虐待、あるいは虐待の疑われるグレーゾーンの支援を受け続けてきた。そのような不適切なかかわりに怒りや不快感を覚え自ら日常的継続的にストライキを実行した。それが反抗期に至ってエスカレートして「暴れる」という行動で表現せざるを得ないなかで、殆ど進路について説明や適切な支援がなされないまま、限られた情報しか手に出来ず、将来に対するはっきりしたビジョンも与えられずに、職員からの虐待的支援を回避するという理由でより安全な進路である「特別支援学校」を自ら選択した、あるいはする形になったということになる。

(2) 一時保護所、里親の元での生活の経験

この時期についての「語り」の特徴は施設＝暗黒時代、里親＝満たされた幸福な時代、一時保護所＝中間時代という色分けであり、過去に対しては「暗黒時代からの脱出（エクソダス）の物語」として語られていること、里親との出会いは劇的な変化・転換、ある種の「救いの物語」のように語られているところである。このこと自体、本人がグループホームの支援を受けて自らの経験を語りなおしている証左であり、里親家庭での一年間を中心にアイデンティティを再形成しているというしるし、である。

そのことを前提として含みつつ、彼の各時代の経験を見て行くと

- ① 特別支援学校入学後も、施設から見れば相変わらずイライラした「困った子ども」であり続けた。彼の側からすれば、日常的な職員の強制に対して、違和感を抱きつつも上手く言語化できず、あるいは言語化する時間を与えられずに、暴れるという自己表現をするしかなかった「困っている子ども」としてあり続けた。特別支援学校での自由な生活が息抜きであり、そこでようやくバランスを取っていたのであろう。

- ② 盗みの疑いをかけられるという事件があり、追い詰められた本人は施設を出て、最終的に児童相談所に自ら SOS を出して一時保護所に入所する。施設の側の理解に立てばこれは「無断外出」であり、問題行動である。本人からすれば今までの生活環境に見切りをつけて脱出し、リセットしようとする強い意志の表現である。
- ③ 一時保護所での一年間は施設に比べればストレスの格段に少ない生活であり、本人には「暇な時間」として経験されたが、職員との関係も良好だった。そのことは一般的には管理性が強く刑務所のように、表現されることのある保護所の生活体験とは大きく異なっていて、一定の達成感や解放感が感じられる。
- ④ 一時保護所での、児童養護施設職員による本人への帰還説得は見事に失敗した。児相、保護所側は本人の意志決定による退所とは見ておらず「問題行動」として説得を執拗に試みたように思われる。本人からすれば無断退所は長年施設生活に辛抱を重ねた上の意志決定であり、渾身の抵抗であった。
- ⑤ 福祉専門職であり、神学生でもあった里親は一年という短期の委託期間の中で、実の親子に無理になろうと試みず、キリスト教スピリチュアリティに基づいて本人を受容し、「治療者里親役割」に徹した。本人は当初戸惑いながらも里親の愛情を受け入れ、目立った「試し行動」に出ることもなく、信頼関係を形成する中で「育ち直し」「社会化」を経験していった。本人からすればここに至って初めて愛され、受け容れられる体験をする中で、心の支え、拠り所を得て安らぎを体験したのであろう。結果として自己肯定感の増大や対人関係の改善という大きな変容がもたらされることになった。平たく言えば生まれて初めて人を心から信頼することが出来たのである。

ここで得られた「心の支え」「拠り所」は具体的には契約解除後も里

親の勤務する法人のグループホームに居住し、日常的に会うことが出来るという形で継続していく。前論文では考察しなかったが、里親による「キリスト教スピリチュアリティに基づく支援」の役割が大きく、語りにも多大な影響を与えていることを付加しておきたい。

(3) 就労における経験

この時期については職場における精神的、経済的な虐待、またはハラスメント体験と就労支援の専門職による「パターナリズムに基づいた支援」の被害が語られる。

- ① 就労の場では疑わしい経済的な虐待に加えて、パワーハラスメントや精神的な虐待もあり、登社出来なくなるほどのダメージを被っている。不眠や吐き気等の身体症状が出て来て、自律神経失調症という診断が下りる。
- ② 登社出来なくなったことに対して、就労支援関係専門職から「甘え」という本人に対する見方が提示され、適切な措置として「甘えを助長するグループホーム＝里親のいる場所」から本人への意向打診も全くなされないまま引き離して、厳しさを教えるという「パターナリズムに基づいた」支援方針が押し付けられそうになる。グループホーム施設長の介入により事なきを得たが、それは最も本人の大切にしているものを意志に反して奪われることであった。この支援のプロセスは本人にとっては強い人格否定であり、無力化される体験であった。
- ③ 無力化体験は本人が呼ぶところの「ネガティブ・スパイラル」を招くものだった。それは死にたい、消えてなくなりたいという希死念慮であり、根本的には意思決定を否定された「スピリチュアルペイン」⁽⁷⁾に由来している。大切なものを取り上げられる→無力な自分を実感する→こういう自分は生きている価値がない→自分を失くし

てしまおう、という流れになっている。意思決定の権利を奪うことは利用者を無力化すること、とはよく言われるが、そのことの一つの顕れであろう。

彼の語りを再掲しておく。⁽⁸⁾

N ビシビシするグループホームだったら、速攻だった（死んでいた）と思いますよ。秒殺だったでしょう。スパーッと逝ってましたよ。自分が死ぬことによって辛くなる人はいないな、というのが、実際そうなのかは知りませんが。悲しんでくれる人いねえし、いいかな、一人でさっぱりで死んでいれればいいかな。考え方がネガティブっていうか。

（人生を）リセットできればいいんですけどね。戻せないのが時間というのが理解しているんで、取り戻せないものに対する負い目が滲じちゃって、ダメじゃん俺、て。リセットはできないから、無くしちゃえばいい、無になればいい。無くしちゃえばいいというのが、潜在的な考え方。

F 薬飲み忘れると、そういうことになっちゃう？

N 安定しなくなっちゃう。何かで紛らわしておかないと。薬飲んでいない時は、そういう方向に頭が回転していっちゃうんで。ネガティブ・スパイラルが脳の大半を占めているんじゃないかな。薬を飲むとだいたい、それでも三、四割はある。出てくる時はすぐ出てきちゃう。体調悪い時、朝とかはすぐ戻しちゃうんで、戻した後とかは憂鬱ですね。

3. 「思想化」 = 被差別体験を意味づける

先に見て来たように障害というスティグマは本人を無力化して心身ともに追い詰め、自殺念慮にまで至らせた。そしてその時点からわずか数か月で、本人は当事者として語り始めたのである。それは本人にとって

大きな転換点であったろう。

かつて社会学者石田忠は原爆孤老の生活史研究の中で、生活史を聴取しまとめるに当たって「原爆は人間に何をなしたか」「そして人間は原爆に対して何をなすべきか」をリサーチ・クエスションとした。そして後者、原爆体験を克服する論理や思想を見出す営為を「原爆体験の思想化」と呼んだ。⁽⁹⁾

本論で中心的に扱うのは、障害者とされた＝未熟な意思決定支援によって障害者として生きることを選んできた本人が、今現在、体験したことをどう受け止め、意味づけ、障害当事者として引き受けつつけているか、の思想的営為の部分である。石田の概念化に従って本論ではこの営為を「思想化」と呼ぶことにする。

以下、石田による「思想化」の枠組みを簡単に提示しておきたい。

(1) 「惨苦の生」

石田は原爆によってもたらされた被爆者の生を「惨苦の生」と呼んだ。それは病氣と貧困が悪循環し、原爆症に対する不安や死の恐怖に苛まれる生活の状況であり、絶えず絶望や虚無感に襲われる果て知らぬ「ぬかるみ」である。

(2) 「漂流」と「抵抗」

そのような生にあって、荒廃の過程に身を委ね、荒廃の論理が自身に完徹するのを許す態度である「漂流」と、荒廃の論理が貫徹することを許さず、結果的に人間としての誇りを取り戻し生きる意味を見出す「抵抗」という二つの思想的営為の基本的な型が見出される。

以下石田の定義を引用すると

「〈漂流〉が〈原爆〉による人間破壊を象徴するとすれば、それに抗って肉体的・道徳的再生を遂げようとする主体的な営為が〈抵抗〉である。」⁽¹⁰⁾

原爆によってもたらされる人間破壊の過程の中を漂い流れるだけにな

るのか、それに抗って闘うことに導かれるのか。「抵抗」に立つものも、「漂流」に向かわせる力、荒廃の力から自由ではない。この力との闘いの中に思想的営為は存在するのである。

石田はこの二つの概念の着想をフランクルの有名な「夜と霧」から得ている。⁽¹¹⁾ 強制収容所の生活の持つ破壊的な力「強制収容所法則」に流されて利他的、植物的な生を漂流した「回教徒」と呼ばれる大多数の人々と、極限状況の中で自らの苦しみの意味を問い、「己れを脱し、己れを超えて成長する」ことの出来た人々とがいたことをフランクルは見ていた。

受苦を避けがたい所与の条件とした時に、それをいかに受け止めるか。それはフランクルが他の著「苦悩の存在論」の中で「態度価値」と呼んでいるものである。⁽¹²⁾

中村君の場合、「原爆孤老」でも「強制収容所体験者」でもなく、その「惨苦の生」にもその程度において確かにかなりの違いは存在する。しかし「漂流と抵抗」＝「被差別体験」という苦悩に対する「態度価値」とした時に、一般化と適用は容易になる。

5. 中村君の語り

本人の第五回目の面接を中心に現時点での語りを取り上げる。面接は非構造化で一時間程度自由に語って貰った。

(1)被差別体験

社会に出て本格的に差別に出会う

N そうですね、学校だと学校の中だけですけど、会社だと、健常者と触れ合う

「思想化」して生きる

機会もあるんで。会社から出るとき健常者からやな目で見られる。そんな肩身の狭い状態なのに、ということを見ると、すげえなあ、ということを考えますね。差別すげえ。どこから始まったんだかわかんないけれど、昔からの歴史、差別の歴史が根深いんだなああって実感しますね。会社の部署に来るときはいい顔するんですよ。それは障害者だから、蔑み、憐れみなんでしょうね。出た瞬間、態度豹変するんですよ。「何あいつら」って言ってるの俺聞こえちゃったんですよ。「なんでうちの会社障害のやつらいるの」、なんて言ってるのが聞こえて。謎でしたね。仕事してるし、正直過酷。何かしたわけではない人を、障害っていうだけで人を勝手に判断していじめるっていう。マジ最低だな〜って。

中村君は社会に出て初めて本格的に差別に出会う体験をした。それまでの特別支援学校に在学している間は障害のない「健常者」と日常的に触れ合う機会が限定的だったからである。

直属の上司からのパワハラも、名前を呼ばないで「お前」と呼ぶなど差別的だった。そして一般企業「うめや」の特例子会社であるため、親会社の職員と顔を合わせることがあった。そこで出会うことになったのが心無い差別的言動だった。障害があるということで差別をするということに対する怒りが本人の中に生まれてきた。

障害者になるということは地の底に落ちること

中村君は本格的に差別に出会った体験をした時に、高校入学時に療育手帳を取った時のことを思い出した。中学校の仲の良かった友人たちが手帳取得と共に距離を置くようになった。その時に自分で決断したことではあったが「落ちた」、世の中の最底辺に「落ちた」と感じたという。手帳取得前には自分自身が障害者を馬鹿にしていた、「得体のしれないもの、やばい存在」と感じていた。そこに身を置くことになった自分は何だろう、と不思議に感じた。

N 自分が障害者と言われた時に、地の底に行った感じがした。その時に最初に思ったのが、「落ちたんだなあ」ということ。落ちるってどこに、なんだろう、と今なら思うけれど、障害者が世の中の最底辺という感覚があった。手帳とって、中学校の友達が少しずつ距離を置くようになって。落ちたなあ、と思い自分は何だろう、と不思議だった。

F 友達が距離を置くようになったんだ。

N やっぱり得体の知れないものですから。バカでヤバイ奴らだから。自分自身がバカにしていた存在がそういうもの。

他の人もたぶん同じ。今まで接してきたけれど、そうなったことでどう接すればいいのか、その人たちは理解できないから。距離を置くことで自分たちは何も考えなくてもいいから。そう考えると、障害者ってすごい悲しいなあ、と思う。

F そういう話、とても新鮮に聞いている。身体の障害で落ちたな、という感覚はないと思う。能力、学力でステータスが決まる社会で、落ちたな、という感覚が生まれるんだらうね。

障害者となった自分と周囲が距離を取るようになった理由は、自分とどう接すればいいか分からないから、距離を置くことでそのことについて考えなくてよいから、つまり触れたくない腫物のようなったため、自分たちを守りたいから、であると本人は考えた。そしてそのように腫物扱いされる障害者という存在、自分を含めて、「悲しい」と表現する。

障害が分かれると彼女とも別れることになった

気持ちを察することが上手で、マメな中村君は異性からかなり「もてる」方であり、よく異性から告白された。告白を受け入れて悩みながらも交際を始めたことも何度もあったが、秘密を持っていることで関係がぎくしゃくしてしまい、問い詰められて障害についてカミングアウトすることで、彼女とも別れる、距離を取られることが多々あった。それは

友人から距離を取られるのと同様であった。

N まだ最初の方も若かったので、オッケーと思っていました。付き合うってなった時、どうすればいいんだろうって悩みましたね。収入だって、安定しないわけだし。安定してもそれ以上でも以下でもないし。どうしたらいいんだろう、と悩みました。でも、言ってきてくれているわけだから付き合いしておくか、と思いました。でも人って仕事している時、後ろめたいものがあるから、態度が変わるんですね。それに気づいたのか、何か隠してることあるの、と言われて、カミングアウトしたら、別れることになってということが多々あって。その偏見ですよね。障害持つてるから別れる。よくありましたね。

中学のときは若かったからなんでも楽観的に考えられましたけど。今は、自分自身とその後が関わるんで。なんとも言えない、みたいな。距離感が難しくくて、無駄に期待させちゃうのもあれだし、というのが一番辛いんで。でも、普通の恋愛したいですね。みんなしたいと思うんですけどね。一歩下がっているくらいがちょうどいいんですね。距離感的なものが弱めなくなる、というのが一番痛手なんで、隠すのが一番妥当なのかな。

今は普通の恋愛がしたい、と望みながらも、相手に期待させないように距離を保って、障害があるということを隠し続けることが妥当、と結論を出している。孤独の生を生きざるを得ない苦しみが語られている。

恋愛について相談されても困る

そのような中村君は障害を持った仲間から恋愛相談を受けることがある。自分が障害のことを告白して振られたことがあるので、相談されても困る、という。

周りでも、相談受けますけどね、自分自身がうまくいってないんで、その時に言っ

てあげる言葉が見つからないんですね。自分が障害であることを相手がわかった時にフラれるということがあったんで、隠し通すことは無理だし、仮にもし結婚することになった時、結婚する前（経済的なことを話し合うわけだから）わかっちゃうわけだし。本当にお互い信頼しあっていて、お互いがこの先どうなるかわかっているならいいんですけど。自分はずいぶんいいんで、他人にも正解がないんで、相談のってものも言えなかったですね。

(2)体験の「思想化」

自分も差別していた

差別に対する怒りは容赦なく自分にも向かう。自分も職場の障害者や同級生を差別していたという厳しい目、罪責感として語られる。被差別者であると同時に差別者でもあるという自覚はグループホーム施設長であり、牧師でもあるA牧師との語り合いから生まれたものであるという。

N 人のことを見下していた自分がいたんで。周りの人たちが結構重かったんで、この人たちが出来るなら、自分もできるんじゃないの、みたいな考えがあって、そこでちょっと甘えてましたね。

F そのコメントはずいぶん自分に厳しいね。

N Aさんと話すようになってから、ずいぶん考えが変わってますよね。自分が、口では変えたい、と言っているながら、人のこと見下してたんだな、というのがあって。自覚があるんで。学校でもそうだったんですね。差別と同じことしてたんですね。

差別が存在する理由

中村君の差別に対する思考は更に深まり、自らが加害者、被害者となっている差別について、それが存在する理由について考察される。

「思想化」して生きる

N 先入観によって塗り固められたレッテルがすごく重く感じたりする。なかなか外れない。先入観って時代によって変わるものなのに、障害者に関しては変わらない。差別は何で廃れないんだろう、って気になる。人は自分より下の人を作りたい、下を見たい、というのが潜在的にあって、障害者という自分たちより下の人間がいることで、自分たちが優越感に浸れるのが原因かなあ。白人と黒人の差別は、何とも言えない。黒人は身体能力がかなり高い。黒人とバスケしたけれど、3対1で負けた。中学生相手に高校生が負けた。絶対勝てない領域だった。白人は黒人には体力的にかなわないから、差別していたのか、たぶん。だけど、こっちは、内面的な人間の悪いところの根深いところが差別と化しているから、拭い去ることはできないのかな。

障害者に対する差別が存在する理由をまずは自らより劣るものを創り出して安定したい、という人間の願望、優越感に求めている。更に思考を黒人差別に広げて、劣等感が差別を創り出すこともあるという風に一般化したうえで、更に立ち戻って障害者差別の根深さを「内面的な人間の悪いところの根深いところが差別と化している」と意味づけている。人間の本質にあるもの、根底に横たわるとす黒いもの、敢えて言うならば「罪」とでもいうようなものに差別の根源を見ている。

講義活動を始めたわけ

中村君はグループホームの施設長のAさんの勧めで、知的障害当事者としての講演活動を始めたが、その内的な意味づけはどんなものなのか。

N ものの価値観が世の中の人に植え付けられちゃってるから、俺も落ちたな、と思っているだろうし。先入観は危険なんだな、先入観さえ取り除けばもう少し、手と手を取り合っていけるのに、少しは分かち合える、というのが俺の願い。そういうことから講義活動も始めた

自分は社会の先入観、偏見によって、「障害者に落ちた」と意味づけ
て来たとし、世間一般の人たちも同じである。差別は人間の本質に根差
したものであると思うが、その壁に挑戦し、少しでも壊して、障害のあ
る人もない人も共生して行けるようになりたい。そういう思想が見て取
れる。

障害者のまま、生きてやる

中村君は実は最近、グループホームの施設長 A さんから、障害認定
を外せる可能性があることを聞かされている。実際にはおそらくボー
ダーラインであるからだ。障害者としての差別を味わい、心の病まで経
験した本人は、常識的に考えれば当然、障害者手帳を返納して差別され
ない側に戻ると予想される。

しかし、彼は違っていた。健常者に戻ろうかという思考も働いたが、
そのままにして障害者であることを引き受けて生き続けることにした。
自分一人、障害者から外れることは特別支援学校等の仲間たちを裏切る
ことになるような気持ちがすること、仲間を裏切れないということとそ
れに加えて当事者でなければ分からない差別というものを味わうことに
意味がある、という。

N 差別の力ってある。理解不能。障害になることで差別に触れ、当事者、受け
た人じゃないとわからないことがあるんで。なつてたままの方がいいのかもな、つ
てことで、そのままにした。再認定で本当は、健常者に戻ろうかな、とも思った
んですけどね。目の前で、聞こえちゃったんで、この他に何かあるの、みたいな、
無駄な探究心が出ちゃいましたね。色々経験しましたよね。なつたんだし、ま
た別の場所ではどうなるんだろう、という気持ちがあります。どういう差別があ
るんだろう。

本人の意味づけは未来志向的である。「無駄な探求心」と呼んでいるが、障害者として差別されることがこれから先どんな体験となるのか、敢えて体験して見極めたい、そう語るのである。

パイオニアになる意志

中村君は専門学校に行つて「あんま・はり・きゅう」の資格を取りたい、という。そして自立するのが夢であると語る。それが好きなことはもちろんだが、障害者のまま進学を果たすことによって、障害者でも専門学校や大学に進めることを証明し、知的障害を持った人たちの「役割モデル」となり、パイオニアになりたいという。

N これから専門学校目指している障害者がいたとして、何も知らずに行つたとしたら、すごい恐怖。もし先に経験している人がいたら、その人の話聞けるわけじゃないですか。そう考えると（専門学校に）行つてもいいかな、と。

誰かが経験していないことって、挑戦するのってすごい勇気いると思う。障害者スポーツとかって、最初に始めた人すごい勇気いった。すごい批判、バッシングが出て。今でこそ小さいですけど、オリンピックできている。最初に始めた人すごい勇気いったと思う。誰かが、その当事者のままでやってみると、誰かが経験しないと、伝えることもできない、と思うと。志半ば、折れている人も結構多いんで。会社でも「学校行きたかったんだよね。でもどういふの受けるかわからないから、怖くていけない。」という人多かったんです。障害者でも大学もいっていい、ということをもっと知らなければならぬ。本人にしか言えないことがある。自分はメンタル弱いので、強化にもなるかな。

後から来る仲間のために、志が折れてしまう人たちのために、障害当事者として道を作りたい。本人の思想は紡がれていく。

人間的な思考が進んでいく

本人の思考の深化，つまり思想化に感銘を受けた筆者は感じたままをぶつけてみた。

F やはり，N君の話聞いていると，知的障害のレッテルが間違っているような気がする。知恵遅れというより知恵進みみたいな。

N 最近よく言われます，「本当に18歳？俺の考えに気づくのに25，6歳までかかったよ。」，みみたいな。多分，今までの生活が過酷すぎて，知恵が進みすぎたんですよ。人間的な思考は進んでいますけど，勉学はどうなんだろう。

本人の「思想化」が進んだのは過酷な体験を意味づけざるを得なかったから，だというニュアンスが感じられる。つまり苦悩が彼の思想的営為を創り出したのである。

4. 考察

ナラティブアプローチはクライアントが聴き手に対して繰り返し，自分の物語を語る中で，異なった人生の意味づけ，物語を見出していく支援である。支援者としてのグループホーム施設長A氏に語り，他の場所で語る中で，またある意味筆者に対して語る中でも，新たな意味づけが生まれつつあると言えるだろう。

前提として萌芽的である印象は否めないが，中村君の語りには石田の提示した「思想化」の方向性が見て取れる。

(1) 「漂流」

再掲した「ネガティブ・スパイラル」の語りの部分は本人の「漂流」の体験をよく表現している。差別のもたらす影響により，自己否定の声を常に自らの内側に聞き，自分を消したい，殺したいという思いを抱え

たまま生きていることが語られている。その自己否定の声は身体化し、「適応障害」として今もなお彼を蝕み続けている。

また、今回の語りの中でも差別を受けつつ、「障害者になることは地の底に落ちること」であり、隠して生きる孤独、カミングアウトして友人からも恋人からも距離を置かれ見棄てられるという孤独が語られる。

(2) 「抵抗」

① 「対象化」

しかし、本人の体験は被差別体験として対象化されつつあり、差別とは何か、どこから来たのかなどの思考に進んでいる。それは人間の本質に横たわるもの、根底にある罪のようなもの、として考えられるに至っている。石田は「〈抵抗〉の〈立場〉へ〈飛躍〉することによってのみ、被爆者は〈漂流〉の事実を認識することができる。自己を対象化することなくしては、自己の生きざまを〈漂流〉のそれとして確認し得べくもないのである。」⁽¹³⁾と述べているが「抵抗」への端緒が開かれていると見てよいだろう。石田によればフランクル等の強制収容所の被収容者にとっても自分を苦しめているものを「対象化」する行為は「抵抗」への飛翔のステップとして重要であった。⁽¹⁴⁾

② 罪意識

本人は差別を対象化して捉えた時に、自分もまた差別者として仲間を差別していたということに思い至り、罪意識を自覚した。（そこには牧師である施設長Aさんの影響もあるが直接に罪の概念を伝えたというようなことではないだろう。）石田は道徳的再生と罪意識の関係について以下のように述べている。「人が過去のあやまちをして生産的なものたらしめる唯一の機会が道徳的再生の追求にあることが明らかにされている。それは体験の思想化の方法の一つである。道徳的再生を得ようとする中で人は現在のおのれを乗り越えることができる。それは人をより高い思想的地位におしあげることができる。」⁽¹⁵⁾ 罪意識は本人を道徳的再

生の追及におもむかせた。それは反差別の立場に立って「語る」、という行動であった。かつては自分も囚われていた差別感、先入観という壁を取り払って理解し合える社会を作るために語ることであった。

② 「受苦」、または「態度価値」

今一つ中村君の思想的営為の中で目立つのは障害者であることから逃れずに、全的に引き受けて行こうとする態度である。それは当然差別を甘受することも含まれる。先に書いたように本人は手帳を返納することも打診されていた。しかし敢えてそれを引き受けて行こうというのである。

そして引き受けていくことから自分の果たすべき使命を見出している。それは障害者として当事者にしか味わえない差別を見極めようということと、先述したように差別という壁を取り払って理解し合える社会を作ることである。

このような逃れられない苦しみ（中村君の場合逃れる可能性は残されているのだが）を我が物とし、生きる意味をそこに置き、外部世界に対して己の主体性を確立する、宗教的な表現を用いれば自分の十字架を担う担い方こそが、フランクルによれば人生により深い意味を与える機会となるものであり、⁽¹⁶⁾ 「態度価値」である。本人は最後のやりとりで軽い口調で話しているが、筆者のみならず周囲が感銘を受けたのは、この態度価値の部分である。

④ 未来志向

「態度価値」から生まれた本人の使命感の一つはパイオニア（開拓者）となって知的障害の当事者たちが進学し、資格取得して夢を実現することの道を開きたい、ということである。本人は「語る」という行為から自分の生きる意味を「後から来るもの」「未来」に結び付けているのである。このことについてフランクルは次のように述べている。

「いい換えると、わたしがなにかのために、だれかのために苦しむと

「思想化」して生きる

きにも、私は苦悩を志向することが出来るのであり、意味豊かに苦悩することができるのである。(中略) 意味豊かな苦悩とは『…….のための苦悩』である。』⁽¹⁷⁾

中村君はここに至って自らの被差別体験を豊かな苦しみとすることに至っているのである。

5. おわりに

最後に中村君の語りに見られるアイデンティティーの変遷と専門職の本人に対する見方を簡単に表にしてまとめた。本人の意味づけと専門職の見方の違いの大きさが指摘できるだろう。

表

	本人のアイデンティティー	専門職の見方
児童養護時代	「暴れざるを得ない子ども」 信頼関係がない職員から日常的に精神的・身体的虐待、あるいは虐待の疑われる支援を受け続けてきて、不適切なかかわりに怒りや不快感を覚え自ら日常的継続的にストライキを実行してきた子ども。	「暴れる困った子ども」 幼少時の被虐経験から情緒に障害を持ち、ストレス耐性に乏しく日常的に爆発を繰り返すために支援困難な子ども
進路選択	「逃げる子ども」 殆ど進路決定支援がなされないまま、職員からの虐待的支援を回避するという理由でより安全な進路である「特別支援学校」を自ら選択した子ども。	「勝手な子ども」 普通学校への進学という誘導にもかかわらず、自分勝手に特別支援学校への進学を決定し、障害者としてのコースを選択した自分勝手な子ども。
無断外出	「自分で人生をリセットする子ども」 今までの生活環境に見切りをつけて脱出し、人生をリセットしようとする子ども。	「無断外出する問題な子ども」 無断で施設を脱走し、勝手に支援関係を切って勝手に兎相に飛び込む問題な子ども。 兎相も元の児童養護に戻すことを考えていた。

里親委託	「初めて愛された子ども」 はじめて全面的に里親から受け入れられる経験をし、戸惑いながらも安らぎを覚え落ち着いた子ども。里親が精神的な拠り所となる。	「安定して育ち直しをする子ども」 ここに来てはじめて、本人と支援者の理解が一致を見た。
就労支援	「無力化された本人」 職場における疑わしい経済的な虐待に加えて、パワーハラスメントや精神的な虐待もあり、登社出来なくなるほどの心身のダメージを被って「死にたい、消えたい」感じるまでに無力化された本人。	「甘えている本人」 「甘え」という本人に対する見方が提示され、適切な措置として「甘えを助長するグループホーム＝里親のいる場所」から本人の意向を無視して引き離し、厳しさを教えるという「パターナリズムに基づいた」支援方針が押し付けられそうになる
語り始める	「思想化する本人」 被差別体験を対象化し、障害者であることを引き受けつつ、差別を解消するという理想を持ちながら、仲間たちの未来のためにパイオニアとなるべく語り始めた本人。	「現実との折り合いに苦悩する本人」 就労に向けて現実と希望との間で苦悩する本人。語ることによって新たな意味を体験に見出し、エンパワーされる支援を受けている。

まとめとして本論が知的障害者ソーシャルワークに関して意味するところを述べて置きたい。

- (1) 萌芽的であり、語りの厚みに欠ける限界はあるが、本論では「知的障害当事者とされている人」にはリスペクトされるべき思想的営為が見いだされた。きちんと支援者は治療教育モデル⁽¹⁸⁾を脱し、障害当事者と向き合って物語を聞き取り、エンパワーメントしていくべきである。

本人の語りには思想的営為が見られ、しかも深まり＝「豊かな苦しみ」が見られる。本人を厳密に「知的障害者」と同定することは難しいが、治療教育モデルに押し込められて専ら「教育サービス」とされて来た軽度知的障害者の支援⁽¹⁹⁾を、障害のない人と同等にきちんとソーシャルワークの土俵に載せていくべき方向性

は示唆されている。

- (2) 専門職の見方と本人のストーリーとをきちんと並べて検討し、きちんと本人のストーリーを中心とした「本人中心の支援」を再構築すること。

知的障害者への支援は安田（2011）が名付けるところの「支援者中心思考」⁽²⁰⁾が先行し、本人の意向や欲求以上に職員や支援者の考えや視点や価値判断が優位に働きがちであった。その傾向を是正し、支援者の見方を意識化したうえで、本人のストーリーを中心とした「本人中心の支援」を意識的に実践していく必要がある。

今回の知見を基にして次の研究課題はグループホーム等に居住する様々な生活歴を持つ軽度知的障害者の語りを聴取し、更に「本人中心の支援」を考えていくこととする。

註

- (1) クライアントが語ることによって自らの物語を整理し、語りなおしながら自らのオータナティブ・ストーリーを見出していくという支援である。「ナラティブアプローチ的」と控えめに形容したのはどの程度意図的で厳密に実践されているのかが判明しないため、厳密なナラティブアプローチよりは支援者がやや強く意味づけに関して介入している感があった。荒井浩道（2014）ナラティブ・ソーシャルワーク、新泉社。
- (2) 中村君については少なくとも知的障害者と社会的にされていて、差別や排除等も含めて社会的な不利益を被っている存在であることは事実である。実際にはおそらく、IQ的にはボーダーラインの青年なのであろう。グループホームの施設長Aさんによれば長期的には療育手帳を返納し、非障害者として生活する

選択肢も考慮されているとのことであった。

- (3) 深谷美枝 (2018) 『『知的障害者』として生きることを何故選んだのか —ある青年の「語り」から—』, 明治学院大学社会学・社会福祉学研究 149 卷, p.221-242.
- (4) 深谷美枝 (2018) 前掲論文.
深谷美枝 (2020) 「里親との出会い—ある知的障害者とされた青年の「語り」より—」, 明治学院大学社会学・社会福祉学研究 155 卷, p.1-26.
深谷美枝 (2021) 「就労場における経験 —知的障害とされたある青年の「語り」より—」, 明治学院大学社会学・社会福祉学研究 15 卷, 印刷中.
- (5) 深谷 (2020) 前掲論文, p.1.
- (6) ドミナントなストーリーとは語り手(患者, 利用者, 相談者等)が思いこんでいる物語のこと。「こだわっている物語」と荒井は前掲書で呼んでいる。この文脈では福祉施設従事者が善意によって作り上げた実践を支配する物語のこと。山本智子 (2016) 発達障害がある人のナラティブを聴く, ミネルヴァ書房, p.100.
- (7) スピリチュアルケアの領域で深い存在の痛み, 生きる意味の痛みについて用いられる概念。最も狭義ではスピリチュアルケアはこの痛みに対するケアとされて来た。
- (8) 深谷 (2021) 掲載予定.
- (9) 石田忠 (1986) 原爆体験の思想化—反原爆論集 1, 未来社, p.104-112.
- (10) 石田前掲書, p.128.
- (11) 石田前掲書, p.136.
- (12) V. フランクル (1986) 苦悩の存在論—ニヒリズムの根本問題, 真行寺功訳 新泉社, p.106 以下。原著は Homo Patience, Versuch einer Pathodizee, 1951.
- (13) 石田前掲書, p.136.
- (14) 石田前掲書, p.150.
- (15) 石田前掲書, p.164.
- (16) 石田前掲書, p.153.

「思想化」して生きる

- (17) V. フランクル前掲書, p.126.
- (18) 治療教育モデルについて。知的障害者は我が国においても諸外国においても、一方的な教育の対象であり、対等な援助関係を結んで支援を展開するソーシャルワークの対象とはなりえて来なかった歴史的経緯がある。
- (19) 中野敏子（2009）社会福祉学は「知的障害者」に向き合えたか、高菅出版, p.234-237.
- (20) 「支援者中心思考」とは専門職の持っている支援の枠組みに合わせて、本人の意向を全く聞かないか、軽視して支援する考え方であり、多くはパターナリズムに支配されている。それに対して「本人中心」とは本人の意志決定を大切にしていって支援する考え方である。

安田三予子（2011）「支援者の不適切なパワ－行使の抑制と『本人中心』の価値化 - 脳性麻痺者の一人暮らし支援を通して」、松岡克尚他編著, 障害者ソーシャルワークへのアプローチ, 明石書店, p.161-195.